

## 常磐の松の下かげに

——「ちりめん本 日本昔噺」寄贈の経緯——

横 尾 文 子

貞明皇后というお方について、御歌所寄人であった佐佐木信綱は「御病がちにわたらせられた大正天皇にささげ給うた赤誠の御心」「謙虚にして華美を退け給うた」（『貞明皇后御歌謹解』昭和二十六年、第二書房）と、崩御の秋に表した。それから二十年。新たに『貞明皇后』という美麗な本が主婦の友社から刊行された。皇后に妃殿下としてお仕えになられた秩父宮勢津子様・高松宮喜久子様・三笠宮百合子様を追憶なさるといふ仕組みで、編集に入江相政侍従長、木俣修先生、福田清人先生が当たられている。

昭和四十六年の上梓。皇室に新風が吹きかけているころ、なぜ三宮家妃殿下のお出ましなのか。なぜ社外から三名の編集委員なのか。入江侍従長と福田先生は東大国文の同期、木俣先生は宮内庁御用掛であられたので、お友達ゴッコで

お名前を連ねられたのだろうか。

学祖下田歌子先生作詞の校歌「常磐の松の下かげに開くをしへには桜君がめぐみの露浴びてにはへやしまの外までも」が身になじんできていたころだから、そんな感想を持ったのかもしれない。渋谷駅から日赤産院行きバスに乗り、常陸宮邸を過ぎると学び舎があり、ウツカリ乗り過ぐすと國學院大學であった。常磐松の校舎敷地は、かつて皇室の御料地で、その一部を下田先生に下賜されたと校歌習得のおりに聞かされた記憶がある。

同、昭和四十六年。『日本昔噺英訳本叢書 ちりめん本』が福田先生の手もとに届いている。福田先生は「明治十八年九月刊行の「桃太郎」を『日本昔噺』第一号として、二十五年十二月刊行の「養老の滝」に終る二十冊の童話の

英訳本が鮮斎永濯の画で装われて、刊行されている。／そのことは児童文学研究者は、承知のことと思うが、この発行者日本橋京橋区日吉町十番地長谷川武次郎とは、いかなる人物か、またどうしたいきさつで、こんな本が出たのか」と疑問に思われ、版元を捜されて訪問。

すると、「武次郎は嘉永六年、江戸に生まれ、家業は質屋であつた。一橋の高商の前身に入学、ホイットニイ校長時代だったが中退、出版の動機は、学生時代の英語教師だつた外人の紹介で、知つた外人に昔話を長谷川が語り、それを訳してもらつて出版した」などの情報を入手。さらに、「ある古書店が逆輸入して拙宅に持参した時の価格は十万円位ついていた」そうである。

本邦における「ちりめん本」紹介の嚆矢（日本古書通信）昭和四十七年であつた。

\* \* \* \* \*

今でこそ「比較文学」「児童文学」の講座はどちらの文学部でも設けられているが、昭和四十年代、比較文学は東大駒場のみ、児童文学は実践のみの開講であつたようだ。といつても、高校時分から開講科目なんぞ知りもせず、教頭の花山院親忠先生から「国文学科には女子大初めての博士課程があるから、花嫁修業にもいいし罷り間違つて勉強したくなくても良からう」のお勧めで、佐賀西高校から三

名文学部に進学しただけのこと。入学してみると、レポート提出が遅れると女性教授から半紙に墨書「十日の菊 六日の菖蒲」の前で諭されたり、「不屈者」「不埒者」と叱られたり、大学というより家塾の空気が濃かつたように思う。やがて木俣ゼミに入れていただき、北原白秋の世界にも親しんだ卒業後、昭和四十八年から五十年まで文学部副手を拝命した。

国文の副手は四名。任務は似たようなものであつたが、詩歌文学研究室付きの筆者には、宮内庁御使者接遇と、夏場になると毎土曜午後一般公開で「児童文学講座」（主催は日本児童文芸家協会 補佐の二件が加わつていた。

宮内庁の御使者をお迎えするときの応対、これが難しい。高校時代の教頭先生に泣きついた。花山院先生は六歳で侯爵家を継ぎ、終戦後からの四半世紀、佐賀で教員生活を送られ、そのころは奈良春日大社の宮司になつておられた。先生は「三条西サンは仲間内だから、今度、霞会館であつたら、君のこと言つとくよ」「ほら、ご覧。二十年ごとの式年造替のために作られた、みごとに（工芸品）だろ。お祓いをして奉納すると（御神宝）になるんだ・」などと呑気なことを言い、春日の巫女長から神道流儀の所作を特訓していただいた。

無作法ゆえに身の置き所がなかつた副手時代、のびのび

できるのは福田先生のお宅で、藤枝夫人と同郷であったためネイティブの佐賀弁が遣えた。憧れの〈ちりめん本〉も手に取らせていただいた。版元は今も上野あたりに在ること。紹介状片手に、上根岸の西宮版画店にうかがうと、旧・陸奥宗光別宅だとかで、オシヤレな西洋館であった。出てみえたのは気さくなオジサンで、粹といおうか、江戸っ子である。

九州の田舎娘に〈粹〉なんて解るはずもないが、副手一同、守随憲治学長宅に新年恒例のご挨拶に伺うと、ややあつて〈六尺ふんどし〉の締め方を実演なさったことがある。今の時世ならセクハラ騒ぎになるところだが、オキヤンな退任した先輩副手の峻しに応え、姪御さんに木綿一反を所望され、実演。イヤラシさは微塵もなく、粹というモノを知った瞬間であった。歌舞伎役者による舞台上の早替わりのようであった。

西宮のオジサンも飄逸で、閑日、一人でよく訪ねた。出ていただくお茶がおいしい。佐賀の銘菓を持っていくと、オジサンは率直に「お持たせだけど、コレは一寸ね・・・」と小娘を口惜しがらせる。〈ちりめん本〉の話も伺ったはずであるが、甘味合戦のことばかりが思いだされる。もしかしてオジサンは左党で迷惑だったのだらうか。

ともかく長谷川武次郎は、西宮家から養子に出た人物で、

ペリー浦賀来航の嘉永六年生まれというから、鹿鳴館での舞踏会華やかなりし明治十八年には齡三十二歳。よくぞ海外向け「日本昔噺」の企画出版を思い立ったものである。まもなく副手を終え、帰郷することをオジサンに伝えたら「一寸、お待ち。戦時中、方々に疎開させていたモノがあるから全二十冊揃うかもしれん」。故郷に戻るなら、持つてお行き」と直にお譲りいただいた。今回、母校実践に寄贈する〈ちりめん本〉は版元西宮家からのお手渡しであり、決して古書店などを経て所蔵していた代物ではないことをお断りしておきたい。

次に、私事述懐をお許しいただきたい。遠縁に蒲原信一郎という美術品コレクターが居り、筆者の東京時代の身元保証人である。俳号を白雨といい、逝去後〈白雨コレクション〉と命名され、陶磁器・書画・屏風・古文書など約一千点の品々が佐賀県に寄贈された。大学入学時から三十余年、蒲原のオジイチャンには古美術談義を聞かされ、数々の名品を見せられ、試され、鍛えられてきた。日本橋の壺中居美術店番頭サンや東京国立博物館学芸員がオジイチャンに見えていた。木工芸作家の中臺瑞真なだいずしんさんも見えていた。中臺さんとは気が合うらしく、私もご一緒にお茶をいただくのは楽しかった。ある夏、中臺さんが見えるというので佐賀から〈ちりめん本〉を持参し、披露した。紙箱を開け

るや「素晴らしい、手にとって宜しいか」と触られ、「このままの保存では痛みます。私に函をつくらせていただけませんか」。筆者のお気に入りとはいえず、名工に函をつくってもらうなんて夢想だにできなかった。オジイチャンの顔を窺うと頷いている。そのままお預けし、半年後の春「函の出来てきたバイ、上京せんかい」とオジイチャンから電話。

茶道具制作から出発された中臺瑞真氏の函は清楚で、それまで掌に乗せて遊んでいた可愛いくて綺麗な（私のちりめん本）が、途端に正倉院御物に見えてきた。昭和六十年の出来事であった。中臺氏は既に重要無形文化財保持者（人間国宝）になっておられ、当時の私の給料二ヶ月分を御礼とした。桐材の瀟洒な函のお陰で、筆者の（ちりめん本）に対する見方も変わり、絵師や彫師や摺師の声が聞こえてくるようになった。

蒲原が「焼き物は、匂うよ」と云ったことがある。その科白を聞かされた若いころは、変なオジイチャンと呆れていた。今なら解る。「君がめぐみの露浴びてにほへやしまの外までも」の匂いなのだ。

\* \* \* \* \*

古希を迎えて、貴重本の諸々はどこに寄贈したらよいものか、考え始めた。ちりめん本につき、佐賀県の学芸員や司書は「白雨コレクションの函は、中臺氏制作じゃありま

せんか。蒲原さんのお側にしていただけませんか・」。しかし、はたして（ちりめん本）そのものの研究は進められるのか。

思いあまつて、親炙している川本皓嗣先生（国際比較文学会名誉会長、日本学士院会員）にご相談した。先生は白秋追究も深く鋭く、平成二十二年に柳川で日本比較文学会九州支部大会を開催したときには特別講演をたまわっている。二十七年一月九日の宮中講書始の儀では、白秋の短歌を引かれて「さくさくと――近代短歌を比較文学的に読む」をご進講なされた。西宮版画店の刊行物にはチェンバレンもラフカディオ・ハーンも関係している。川本先生は、母校を筆頭にハーンと関わりの深かった東大本郷文学部など四大学を推挙された。母校実践女子大学には（本間久雄文庫）（山岸徳平文庫）などが収蔵されているから、私ごときの一品を同列に並べられるものではなからう。

だが、ふと気付くと、城島栄一郎氏が学長である。面識はないものの高校一年先輩のはず・。気が軽くなり、さらに調べてみると（福田清人文庫）も収蔵とある。あらまあ、福田先生のお傍なら好いかも・。目録作成を急遽、教えずで県立図書館司書の寺崎さやかちゃんにお願いし、任期終了間際の城島学長にお便りをしたためた。寄贈認可のお知らせが届いた。

かつて勤務先研究室に常置し、誰でも何時でも触れるようにしていたので「ちりめん本、大好き」と慕っていた学生の中には、後年、人気漫画家になったり文学館館長になったりしている者もいる。縁あって約半世紀私蔵してきたものの、留学生もふくめ学生たちと束になってモミクチャにし、死蔵となしてきたのかもしれない。きつと、そうである。神社でのお祓いを考えた。秦の始皇帝に不老長寿の薬草を探さう命じられて来日したと伝えられる徐福ゆかりの、新北神社に神事齋行をお願いした。新北サンは有明海文化圏に住まいする人々が敬慕する産土神で、徐福サンのお手植えとされる樹齢二千二百年の柏楨が境内に亭々とそびえている。

令和三年四月九日。神殿にちりめん本と函を捧げ、これまでの感謝と新たな旅立ちを祈ってくださる川浪勝英宮司は凜々しく、祝詞が清らかに浄らに参列者五名のもとに降ってきた。

\* \* \* \* \*

ちりめん本は日本近世文化の華のように思える。近代に生まれた作品であるが、背景には近世文化が見え隠れしている。このたび、図書館事務部の寺沢白雄先生に懇ろなお話をいただき、近世文化・文学のなかで呼吸をしてこられた佐藤悟図書館長のもとに、ちりめん本をお届けるでき

ることは僥倖であろう。

（オマケその一）これから閲覧される学生や研究者の利便性を考慮し、オマケとして「全作品全頁の記録写真」をお届けしている。作品撮影は國正新伍氏、新北神社関係は北村和秀氏。

（オマケその二）先行研究書に、宮尾與男編『明治期の彩色縮緬絵本対訳 日本昔噺集』全三巻（彩流社、二〇〇九年）がある。写真が付され和訳も試みられた御労作で筆者も愛用しているが、残念ながら奥付と裏表紙絵が欠如。〈ちりめん本〉魅力の一つに、表紙と裏表紙との意想外な取り合わせがある。たとえば、第一三巻「海月」の訳述は「チャンバレイン」。表紙絵は、海底に竜宮城が沈み波間を漂うクラゲに乗った猿。裏表紙には「小判型 天保通寶」と「寛永通寶 四文銭」があしらわれている。テレビドラマで銭形平次の投げ穴あき四文銭（寛永通寶）寛文八年）だ。この意匠はナァゼ？と思ってしまう。サル捕獲に向かったクラゲに、「おまえ、バカチンだね、そのうちお縄になるサ」と擲擲しているのだろうか、などと後付けしたくなってくる。さらに、海産魚のタコやタイやマグロの描き分けも面白く、白いクラゲが一際光っている。職人サンたちが小刀片手に、「こんな細かい絵図を彫らったのか。面倒く

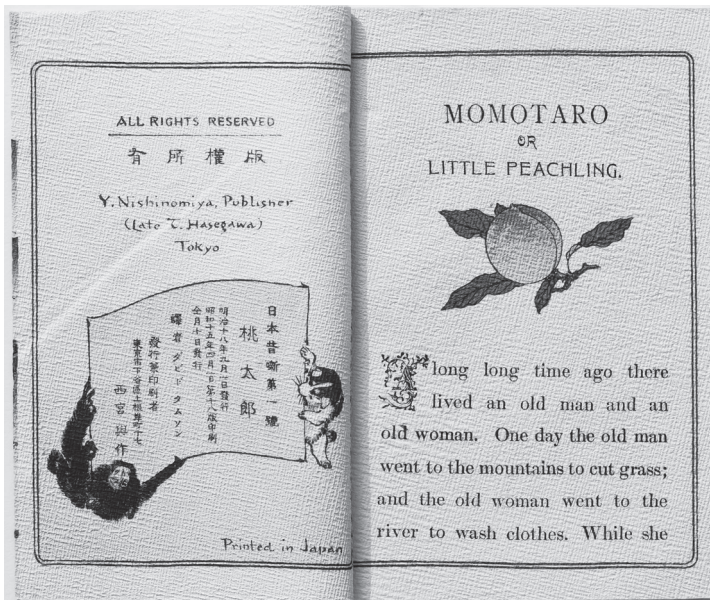


(第1図)

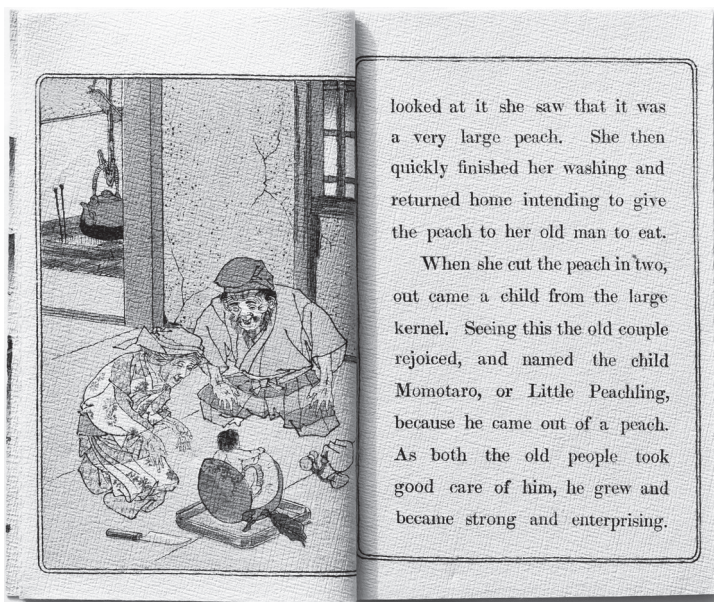
セエつたらありやしなせ」とブツクサ云いながら鍋を削っていたにちがいない。そして「さあ、どうだい。オレの腕前を見てみなせえ」と汗を拭っていたことだろう。こんな風に、旧蔵者である筆者の感想や妄想をメモにし「絵解きちりめん本日本昔噺」として提出もしている。ただいま、貴短大勤務の女史から贈っていただいた江戸名物〈虎屋の羊羹〉で、お薄一服をしているところである。

下田歌子先生の校歌を偲びつつ、西宮オジサンや中臺さんの本意に近づいていただければと願ってやまない。

(よこお あやこ・佐賀女子短大名誉教授)



(第2図)



looked at it she saw that it was a very large peach. She then quickly finished her washing and returned home intending to give the peach to her old man to eat.

When she cut the peach in two, out came a child from the large kernel. Seeing this the old couple rejoiced, and named the child Momotaro, or Little Peachling, because he came out of a peach. As both the old people took good care of him, he grew and became strong and enterprising.

(第3図)

第1図 「桃太郎」表紙

第2図 初版は明治18年9月1日に出版。本書は昭和15年4月

1日に発行された第18版である。

第3図

桃太郎には桃を食べた爺婆が若返って生まれたという話と桃の中から生まれたという二通りの物語がある。本図は桃の中から桃太郎が誕生した場面を描いている。